

悲しみの深みを越えて

「東日本大震災」発生後一カ月に思うこと

山本 佐門

あの大震災が発生して一カ月、気が滅入り
 そうな日々がなお続いている。なによりもその
 犠牲となった人々への深い悲しみとその直
 接の原因となった大地震・大津波の猛威への
 おのき、それに加えて日々新たな様相を見
 せつつ暴走を続ける福島第一原発への恐怖。
 一瞬にして極めて多くの住民の日々の暮ら
 しが奪い去られてしまった——自らの暮らし
 の場そしてその命さえも。今も日々刻々増加
 する死亡者一万二九一五人、その生死がなお
 確認されぬ者（警察に届け出のあつた行方不
 明者）一万四九二一人（いずれも四月九日現
 在）。そして生きながらえた人達の多くはな
 お避難生活や停電・断水・ガス停止下での日
 常生活を余儀なくされている（避難所生活者
 約一六万人（四月九日現在）、停電六〇万戸、
 断水二四万戸、ガス停止一六万戸（四月八日
 現在））。

原発事故については、なお収束の見通しは
 立たず、漏出する放射能は日々大気、水そし
 て土壌を様々な放射性物質で汚染しつつ、

人体を蝕みはじめています。

こうした震災の猛威と原発事故のひどさを
 前にしては、その原因論や責任者の追及、さ
 らには今後の復興策を論じる気にはなれない。
 しかし次のことだけは明確にしておきたい。

今も続くこの大震災による、自然界と人間社
 会の被害は「想定外」の天災にのみ帰せられ
 るものではなく、天災と人災の複合作用、よ
 り適切に評すれば天災と「天災が暴いた人災」
 （「天声人語」朝日新聞二〇一一・三・三〇）
 によってもたらされたものである。天災は人
 間の力で回避できない、それに対する備えに
 よって被害を極小化することができるだけで
 ある。他方、原発事故に関しては、その立地
 条件をも含めその危険性を予測（想定）して、
 運転停止はもとより発電所自体の建設を中止
 することさえ可能である。

何度となく余震が襲う日々が続ぎ、四月七
 日深夜のマグニチュード7・1の地震では、
 津波警報も発令されたほか大規模な停電や断
 水も発生し、新たな犠牲者さえ出してしまっ

た。大量の行方不明者の搜索も遅々として進
 んでいない。原発事故の現状と合わせ「東日
 本大震災」の猛威は継続中であり、事態はな
 お復旧・復興策を本格的に論じる段階に進ん
 でいない。直接被害にあった人達にとつては
 「これからどう生きるか」ではなく、「今をど
 う暮らしてゆくか」が実状ではないだろうか、
 震災発生後一カ月も経つのに。

とはいえこれだけの人的・物的な被害をも
 たらし、東日本の枠を超え、日本社会全体の
 日々のあり方に重大な影響を与えつつづけてい
 る大震災を経験した私達は、今後も「三月一
 日」以前と同じ考え方、生き方をつづける
 ことは難しいのではなからうか。私達がなお
 この社会で持続して安心・安全な暮らしを求
 めたいなら、それが誰であろうと、その猛威
 を含めた自然界と人間社会の関わり方を問い
 直し、科学技術の発展に依存しきつた便利で
 「豊かな」日常生活を反省することはもはや
 避けられないと思う。そして自然界との共生
 （ともに生きる）という考え方を前提として、
 国民の日々の暮らしと生命の尊重を基軸とし
 た生き方を、もつと自覚的に進めてゆく必要
 がある、生活の場はもちろん政治の場におい
 ても。深い悲しみは消えることはなからう。
 しかしこの惨状の先に希望をも見出したい。

八やまもと さもん・北海学園大学法学部教授